

ジェンダー / セクシュアリティの言語分析 — 権力の構築過程を学際的に読み解くヒント —

Linguistic Analysis of Gender/Sexualities: Interdisciplinary Deciphering of the Construction of Power Relationships

宮崎 あゆみ MIYAZAKI, Ayumi

- 日本女子大学人間社会学部、国際基督教大学教育研究所
Institute for Educational Research and Service, International Christian University, Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University

 ジェンダー / セクシュアリティ, 言語イデオロギー, 指標性, 物質性, 権力関係
gender/sexuality, language ideology, indexicality, materiality, power relationship

ABSTRACT

本研究ノートでは、教育学や社会学におけるジェンダーおよびセクシュアリティ権力交渉研究に有効であると考えられる言語概念を紹介する。具体的には、北米言語人類学および社会言語学で中心的な分析ツールである「言語イデオロギー」および「指標性」概念を紹介し、近年注目されている言語の物質性 (materiality) についても言及し、それらの概念を援用した研究例を示す。日本の教育学や社会学的研究において、言語は中心的な課題とはなっていないが、言語概念を取り入れることによって、権力関係のダイナミックな構築過程が捉えられ、ジェンダー / セクシュアリティに関わる二項対立図式を乗り越えられる分析へのヒントが得られることを示唆したい。

This research note introduces linguistic concepts that I consider effective for analyzing gendered and sexual power relationships in educational and sociological studies. Among various linguistic concepts, I explain “language ideologies,” “indexicality,” and “language and materiality,” all of which are central to North American anthropology and sociolinguistics, and show examples of research to depict these concepts. In most educational and sociological studies in Japan, language has often been a non-central theme, but this

paper asserts that through employing linguistic concepts to these studies, we can understand the dynamic processes of power constructions and go beyond the traditional dichotomies based on gender/sexuality.

1. 本研究ノートの目的：言語と権力研究

権力関係がどのように多様な文脈において構築されるのかについての分析は、社会学、人類学、教育学など様々な領域で中心的な課題であり続けている。階級、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティ、デイスアビリティなど、様々な争点を巡って、どのように権力が形成され、どのように行為者が権力と交渉を行い、どのように行為者がアイデンティティを構築していくのかを読み解くべく、1970年代から膨大な量のエスノグラフィ研究が行われてきた (Abu-Lughod 1991; Fordham, 1996; McRobbie, 1991; Scott, 1985; Willis 1981 など)。学校という制度的な場を例に取れば、Willisの記念碑的な研究では、「野郎ども」と呼ばれるイギリスの労働者階級の生徒たちが、巧みに権力の裏をかき、今の楽しみに重点を置き、男性性を強調するサブカルチャーを通じて学校に反抗する過程で、皮肉にも学校の中産階級の価値観から疎外されていく過程が描かれた。Fordham (1996)の研究でも、米国の黒人の生徒たちが、勉強するということは白人として振る舞う (acting white) ことであるという価値観を形成することで、学校から疎外されていくという人種的不平等の再生産過程が示された。このような研究は、主に行為者たちの行動様式や価値観に光を当てて分析を行い、複雑な権力の再生産の仕組みを明らかにしてきたが、行為者の言語実践を詳細に吟味することには重点が置かれなかった。社会学では言語は分析の中心的な焦点にはなっていないことが多く、言語学では、社会構造よりも言語の内的な論理が注目される傾向にあり、言語と権力との繋がりについての分析は、二つの領域の狭間に落ちて見落とされてしまうことが多かったと言える。

本研究ノートでは、言語に光を当てることで、どのように権力交渉の複雑性が浮き彫りにできるのかについて考察する。言語人類学および社会言語学などの言語研究は、言語実践に注目すること

で、上記のような教育社会学的研究が追求してきた権力交渉過程を詳細に分析しようと努めてきた。例えば、Eckert (1989) は、米国の高校で、学校の中心的存在であるスポーツ選手のグループと学校の価値観から疎外されているグループの言語実践を比較し、階層的に異なるこれらのグループの社会的言語的实践を分析した。Eckertの研究は、社会学、教育社会学といった領域の研究と同じテーマを取り上げており、学際的に広く参照されているが、このような言語研究が、学問における領域の壁に阻まれて必ずしも社会学や教育社会学の領域の研究に参照されるとは限らない状況がある。

本研究ノートでは、社会学や教育学の分野で行われるジェンダー/セクシュアリティの権力研究に貢献できるような言語人類学および社会言語学概念を紹介したい。具体的には、北米言語人類学および社会言語学において中心的な分析ツールである「言語イデオロギー」および「指標性」概念を吟味し、最近注目されている言語の物質性 (materiality) についても言及する。最後に、このような概念が、どのように社会学や教育学の分野で行われる権力研究に貢献できるのかを示す一例を挙げ、学際的研究のヒントを示唆したい。

2. 権力関係を分析する言語概念

2.1 言語イデオロギー

言語イデオロギー概念は、言語構造と社会構造をつなぐ媒介として、1990年代から言語人類学や社会言語学の領域で注目され、多くの研究が依拠する重要な概念になった (Kroskrity, 2000; Schieffelin, Woolard, & Kroskrity, 1998 など)。言語イデオロギーは、言語の使用や意味や構造についての話者である私たちの考えを指す。Silverstein (1979) の定義によれば、「人々が認識した言語構造や使用を合理化したり、正当化したりしようとする時に明らかになる言語についての信念の体系

(p. 193)」である。私たちは、「最近の若い女性の言葉遣いは乱れている」「アフリカ系アメリカ人の話し方は文法的に正しくない」などというように、自己と他者の話し方や書き方について、常に話題にしたり、評価したり、批判したりして、自らの考えを形成している。

このような人々の考えは、言語構造を正確に把握しようとする言語学においては、実際の言語使用を忠実に反映していない信頼の置けないデータとして長きにわたって軽視される傾向にあった。確かに、例えば、自分は方言を使わないと説明しながらも実際には使用しているというような場合のように、言語使用についての説明と実際の使用にはズレが生じる場合が多い。しかし、言語イデオロギーの研究者たちは、人々の言語イデオロギーは、実際の使用を忠実に反映していないとしても、重要な研究テーマであることに変わりはないと主張する。なぜならば、人々が言語実践を理解し、説明し、合理化しようとする時に、人々の説明に否が応でも社会関係が反映されるからである。Irvine (1989) が主張するように、言語イデオロギーは「人々の言語関係と社会関係に関する考え方の文化的システム (p. 255)」であり、言語から浮かび上がる社会関係や権力構造を分析できる有効なツールである。

2.2 指標性と指標野

権力交渉を明らかにするもう一つの有効な言語概念として、指標性 (indexicality) が挙げられる。指標 (index) という概念は、記号論を開いた米国人哲学者 Pierce が、3種類の記号のうちの1種類として定義したもので、記号の意味が文脈と結びついて解釈されるものである (Pierce, 1955)¹。Silverstein (1976) の定義によれば、指標性は、「ある物が文脈に『存在』するということを示す記号手段 (p. 29)」である。つまり、指標性は、話し手や聞き手が、社会的文化的文脈に沿って、言語的特徴が指し示すものが何かを理解する手段だと言える。例えば、「これをあなたにあげましょう」と言えば、「これ」「あなた」という言葉は文脈と絡まり、見えない矢印のような指標が発信されて、

実際の者や人物に結びつき、言語コミュニティの参加者は、その矢印を読みとる術を知っているとされる。

しかしながら、実際には、指標は言語と事象との一対一対応を単純に指し示すのではなく、様々な社会的文化的文脈を媒介として、複雑な意味を形成している (Duranti, 1997; Hanks, 2001)。例えば、「フランス語を話しますか」という質問が発せられた時に、多くの文脈においては、単にフランス語の能力を問う意味を持つ。しかし、同じ質問は、フランス語と英語を巡る政治的な葛藤のあるケベックという文脈においては、Heller (1995) の研究で示されたように、政治的な立場を迫るものとして指標され、フランス語話者と英語話者との間で指標性が争われることになるだろう。

このような指標性の複雑性を分析するのに有効な概念として、指標野 (indexical field) がある。指標野は、Eckert (2008) によれば、「イデオロギー的に繋がっている意味の集まり (a constellation of meanings that are ideologically linked) (p. 464)」である。指標は、Labov (1966) を皮切りにした伝統的な言語のバリエーション研究では、例えば、ある特定の発音や文法などの言語的な特徴がアフリカ系アメリカ人の話者を指標するといったように、言語の特徴と行為者が直接対応しているものとしてその繋がりを固定的に捉える向きがあった。しかし、指標野という概念においては、様々な指標が星座のように集まって複雑に関係し合っており、指標とそれが示すものは一対一対応ではない。そして、それらの指標の意味するところは多様であり、常に変わり続けている。

Furukawa (2018) の研究には、指標野の複雑さがよく表れている。ハワイのマイノリティ言語であるハワイ・クレオール、あるいはピジョンには50万人の話者がおり、歴史的にサトウキビ栽培の労働者の言語だったこの言語を話すということは現在でもスティグマである。ピジョンは公的な場で使用する言葉としてはふさわしくないとされ、キャリアを築くためにはピジョンではなく、英語を話すことが必須だとされている。しかし、Furukawa は、ハワイで人気のコメディアンのス

キットを分析し、ピジョンが負の指標だけではなく様々な指標を発し、指標野を形成していることを示した。例えばピジョン話者のホテルの受付担当者が、英語話者である客の対応をするコミュニケーションの中で、担当者のピジョンの言語使用は、プロフェッショナルではなく、効果的ではないという指標を発し、専門性や効率性を指標する言語実践を行う英語話者の客を苛つかせる。しかし、Furukawaは、言語的な特徴およびコミュニケーションを詳細に分析することで、ピジョンをフレンドリーで暖かく、辛抱強く誠実だとする肯定的な指標群、および英語は逆に冷たく短気で不誠実であるとする否定的な指標群を同定し、表向きの権力関係を反転させた裏の指標野を明らかにした。このように、指標や指標野といった概念を用いながら、言語実践をつぶさに分析することで、様々な意味の構成やその変容を捉えることができる。このような分析の試みは、第3節で論じるように、ジェンダー/セクシュアリティ研究が、ジェンダー・カテゴリーを超える変化の糸口を探るために非常に有効である。

2.3 言語と物質性

近年の言語人類学において権力関係を読み解く分析視点として大きく注目されるようになったのは、権力構造の中での言語と物質性 (materiality) との繋がりである (Keane, 2003; Kockelman, 2006; Shanker & Cavanaugh, 2012 など)。西洋思想では、物質とイデオロギーは別々のものとして扱われる傾向にあったが (Marx, 1967 など)、既存の言語研究においても、言語は思想的なもの、物質は具体的なものとして、相容れない別々の現象として捉える傾向にあった。社会科学においては、Bourdieu (1977, 1991) が経済的・文化的・身体的・言語的な資本の関わりを追求したように、権力の物質的な基盤が注目されることがあったが、近年言語研究においても、グローバルな資本主義の隆盛を背景に、物質的な側面が重要視されるようになった。米国の言語人類学では、どのように言語と物質性が協働して意味を形成しているか、

どのように言語が身体化され、商品化されているか、などの多くの課題が注目され、言語と物質性の絡み合いが広く分析されるようになってきている。このような研究の中で物質とされるものは具体的な物体だけではなく、人々の行為を水路付ける場や環境、言語を発音する身体、商品化される情動 (affect) などを含み、現代社会を舞台に広い意味で定義される。

上記に説明した言語イデオロギーや指標性概念も、言語の物質性や物質的な基盤との関わりの中で追求されるようになってきた。例えば、Hill (2008) の研究では、米国において、ヒスパニック系アメリカ人を見下げる「からかいのスペイン語 (mock Spanish)」が広く流布しているが、それは、グリーティングカード、マグカップ、広告のビルボードなど、幅広い物質的な手段に乗って循環し、スペイン語話者に対する知性の無さなどの否定的な指標を発し、人種差別的な言語イデオロギーを強化していることが明らかにされた。また、Basso (1996) の研究では、ウェスタンパッチの言語と場との関わりが吟味され、土地や地理的特徴が象徴的な言語と絡められて、道徳的価値や歴史的記憶を指標し、人々がそれを学ぶことでコミュニティが強まるプロセスを描いた。このように、言語イデオロギーや指標性を物質的な要素や基盤と絡めて分析することは、ジェンダーおよびセクシュアリティの研究でも重要である。次節では、本節で説明してきた言語概念が、ジェンダー/セクシュアリティ研究でどのように生かされてきたのかについて検討したい。

3. ジェンダー/セクシュアリティの権力関係を分析する言語概念

3.1 ジェンダー/セクシュアリティの言語イデオロギーと指標性

1990年代前半までの言語とジェンダー研究においては、「女性語」と「男性語」の差異に注目が集まり、その差異がジェンダーの権力関係を生み出していると主張する研究が多く見られた。例えば、30言語に翻訳され、一般読者にも広く読

まれた Tannen の研究 (1990) では、女性は対等で共感的な言語を使い、男性は序列的で競争的な言語を用いるといった性別による違いが記述された。

1990年代後半からは、ジェンダーによる言語の違いは固定的なカテゴリーではなく、日々の言語実践によって構築されているとする新しい理論的枠組みのジェンダー研究が隆盛した (Bucholtz, Liang, & Sutton, 1999; Eckert & McConnell-Ginet, 2003 など)。言語イデオロギーや指標性概念は、これらの新しい流れの研究の主張を裏付け、ジェンダー権力構築過程を暴く有効な道具となった。「女性語」と「女性」の繋がりや、Tannen のようなジェンダー差異研究者が前提とするように、単純で直接的なものではない。例えば、Ochs (1992) は、ある言葉が、「女性語」「男性語」と分けられるような場合は、3人称の “she” や “he”, “Miss” “Mrs.” “Mr.” などのタイトルなどに限られ、ほとんどの場合は、ある特定の社会的なスタンスや行動がジェンダーと言語を媒介していると言う。社会的なスタンスや行動は、言語が発せられた文脈と深く結びついて理解される。例えば、Ochs は、日本語の終助詞の「ぜ」は、直接的に男性を指標するのではなく、荒い強調を指標することで、男性の話者と結びつけられ、「わ」は、繊細な強調を指標することで、女性の話者に結びつけられるという。

しかしながら、前節でも述べたように、この間接的な指標性の結びつきは、自然なものでもなく、コミュニティの参加者が一様に学ぶものでもない。Inoue (2006) が示したように、女性的だとされる「わ」が19世紀後半までは下品であると考えられていたことや、フェミニズム運動によって “Mrs.” が “Ms.” に変わったことを鑑みても (Silverstein, 1985)、言語とジェンダーのつながりは刻々と変容している。また、英語における “she” や “he” といった3人称代名詞や、欧米言語における女性名詞・男性名詞などのジェンダー言語が近年政治的に争われ、それぞれの文脈で多様性を生み出していることから、ジェンダーと言語の関係が調和ではなく、葛藤に象徴されていると言

える。

このようにジェンダー言語の差異の記述から、ジェンダー構築過程の分析へと変化を遂げた欧米のジェンダー言語研究の転換は、欧米のジェンダー/セクシュアリティ研究全般に強い影響力を持つポスト構造主義 (St. Pierre & Pillow, 2000; Weedon, 1987 など) を理論的な基盤としていると言える。ポスト構造主義に依拠するジェンダー/セクシュアリティ言語研究は数多行われてきており (Motschenbacher, 2010; Tetrealt, 2015 など)、ダイナミックな言語実践に光を当てることで、「女性語」「男性語」といったカテゴリーを乗り越える分析を行ってきた。例えば、Bucholtz (1999) は、オタクを自称する女子高校生のグループが、どのようにオタク的知識と反女性性を特徴とする言語実践を繰り広げていたのかについて分析した。文脈や関係によって微妙に揺れ動くオタク的言語実践を分析することで、女子生徒たちが、言語実践を通じて、オタク・アイデンティティとアンビバレントな距離を取って完全には同一化しない複雑なアイデンティティを刻々と構築していることが明確になった。

このように言語実践によって刻々と変化するジェンダー/セクシュアリティの権力関係を明らかにするためには、前節で述べたような物質性や場との関わりを検討することが有効である。ジェンダーと場についての研究は、人類学の中では伝統的に行われており、例えば、Bourdieu (1970) がカピルの家の構造や物の配置にジェンダー関係が象徴されていると分析したように、場の論理によるジェンダー役割の規定は、様々な文化によって描かれてきた。言語人類学者の Keating (1998) は、ミクロネシアでは、コミュニティの宴会においてジェンダーを含む社会的地位が座席の配置という場によって指標され、この物質的な地位の構築が、言語的な地位の構築を強化したり、逆に否定したりしていることを描いた。また、身体という物質性に関しても、多くの研究が行われており、例えば、Zimman (2016) は、トランスジェンダーの男性が、声を発する自らの身体と交渉している様を描き、トランス男性は男性らしい声を発した

いのだと思ひ込む言語イデオロギーとは反して、声を作るという行為は避け、自然な発声をしようとしていることを明らかにした。

以上のような研究に見られるように、ジェンダー/セクシュアリティと言語研究にもたらされた理論的転換は、「女性語」が「女性らしさ」を指標するという単純な結びつきを疑問視し、ジェンダーと言語との関係の間に、場や身体を挟み込み、ジェンダー言語イデオロギーや指標が複雑に構築される過程に私たちの目を向けさせることになったと言える。

3.2 日本のジェンダー/セクシュアリティと言語研究

日本のジェンダー/セクシュアリティと言語研究は、欧米の研究と同じような理論的変遷をたどってきたと言える。1990年代までは、日本語は、人称代名詞、終助詞、語彙、イントネーションなど様々な側面がジェンダー化されているとして注目され、国内外の研究対象になってきた (Ide & McGloin, 1990 など)。しかし、日本語の「女性語」をカテゴリーとして捉える傾向は弱まり、近年の研究は、日本語のいわゆる「女性語」は、実際に女性が使用する言語のカテゴリーではなく、イデオロギーが構築するもの (ideological construct) として捉えるべきものであると主張してきた (Inoue, 2006; Nakamura, 2014; Okamura & Shibamoto Smith, 2004)。

例えば、Abe (2004) は、レズビアン・バーでの会話の分析を通じて、ジェンダーやセクシュアル・アイデンティティが言語実践によって切り替わりながら交渉されるものであり、流動的なものであることを明らかにした。また、Inoue (2006) は、日本の会社の管理職の女性が、いわゆる「女性語」でも「男性語」でもない中間的な話し方を選択し、女性上司という難しい立場を言語実践によって交渉している過程を描いた。さらに、マリイ (2013) は、メディアに流布する「おネエことば」が多用されるテレビ番組の言説を分析し、様々な色や形で提示されるキャプションという物質性が、どのように実際に発せられた言語と絡まり合っている

のかについて考察した。その結果、キャプションは、セクシュアリティの多様性を提示するのではなく、おネエことばの話者を揶揄しながら否定的な指標を発し、ジェンダーとセクシュアリティの規範を強化するような言語イデオロギーを構築していたことが明らかになった。このように、ジェンダーの指標性がより目に見えやすいという日本語の特徴を生かして、ジェンダー権力交渉のプロセスを明確化することは、ジェンダー権力の構築過程を読み解くための強力なツールになりうると言える。

4. 教育学および社会学研究におけるジェンダー/セクシュアリティ研究への言語概念の導入

本研究ノートでは、北米言語人類学の中心概念である「言語イデオロギー」および「指標性」について紹介し、言語を広い意味での物質性との関わりの中で考察することについても説明した。これらの概念を使用した言語研究の具体例は、使用する理論や注目する側面は違うものの、日本の社会学や教育学で行われてきたジェンダー/セクシュアリティ研究と非常に親近性が高いと言えることができるだろう。日本の教育社会学や社会学では、1990年代よりポスト構造主義的理論に基づいて、多くのジェンダー/セクシュアリティ研究が行われてきており、既存のジェンダー・カテゴリーを疑問視してきた (藤田, 2004; 大滝, 2006 など)。こういった研究が、本研究ノートで紹介してきたような言語概念を取り入れることで、ジェンダー/セクシュアリティ理論の深化に繋がることは明らかである。

例えば、羽田野 (2004) の中学校の柔道部をフィールドとする秀逸なエスノグラフィを例に挙げて考えてみよう。羽田野が調査を行った柔道部では、女子部員と男子部員は同じように厳しい練習をこなしており、実力的には男子よりも上の女子部員もおり、男子が身体的に必ずしも優位とは言えなかった。しかし、様々な社会的実践を通じて、男子の方が身体的に強いという〈身体的優位〉

神話が維持されていた。そういった社会的実践の一つが、武道場の練習場所が性別で分けられていることである。武道場では、男子は女子の倍ほどのスペースを取っており、男女のスペースの間には「見えない境界」がある。女子部員は、時にはその境界を超えて攪乱を起こそうとするが、新しい練習メニューになるとその境界はリセットされてしまうため、攪乱は無効化され、一時的なものに止まる。またもう一つの神話維持実践として、女子の実力を過小評価し、男子の下に置くということがある。例えば、二人で取り組む練習をする時には、実力に見合った組み合わせをするのではなく、女子は自動的に実力がないとされて組み合わせを決められる。昇段試験の受験時期も、女子は3年次、男子は2年次となっている。

この研究に本研究ノートで紹介してきたような言語的な視点を取り入れるとどのような展開が考えられるだろうか。まず、「女子エリア」「男子エリア」にまつわってどのような言語実践が繰り返されているだろうか。双方のエリアの間には、「有刺鉄線」が張られているようだという解釈や、男子は「パワフル」だから広いスペースでいいというような解釈がなされていて興味深い。「女子エリア」「男子エリア」を巡ってどのように複雑な指標野が形成されているだろうか。また、女子生徒を男子の下に置くスペースや実践は、どのような言語で生徒たちに語られて理解され、それぞれどのような指標に結びついているか。例えば、男子が早く受けられる昇段試験でもらえる黒帯が武道場で披露される時、この黒帯という物質はどのような指標を発しているか。また、エリア分けを始めとする様々な神話維持の実践をめぐってどのような言語イデオロギーが形成されたか。このような言語的な視点からの問いを取り入れるならば、羽田野の研究が言語と身体と場と物質性を繋ぐ貴重な分析であることがより明らかになると言える。

羽田野の研究例を用いて見てきたように、言語実践と社会実践の双方を両輪の輪のように分析することは、ジェンダー/セクシュアリティの権力の構築過程を読み解くために重要であると言え

る。また、羽田野も論じているような根強い性別のカテゴリーの呪縛から解き放たれるためにも、有効な研究の方向性と言えるだろう。

5. ジェンダー/セクシュアリティ権力交渉の学際的研究に向けて

本研究ノートでは、日本の教育学や社会学におけるジェンダー/セクシュアリティの権力研究に応用できるような言語概念を紹介し、ジェンダー/セクシュアリティ研究を含む権力関係研究の発展の可能性を示してきた。

日本の教育学や社会学では、エスノメソドロジー研究で詳細なインタラクションが分析されたり（秋葉，2004；江原・好井・山崎，1984など）、国語イデオロギー（Heinrich, 2012；ましこ，1991）や英語至上主義（寺沢，2014）が分析されるなど、言語分析に焦点を絞った研究は一定数あったものの、現在でも、言語を分析した研究は主流であるとは言えない。また一方で、日本の言語研究は、ジェンダー/セクシュアリティに光を当てたもの（ことばと社会編集委員会，2014）は主流ではなく、権力関係全般に関しても関心が高くないため（ましこ，2014）、社会科学と言語学との協同による権力研究は難しい状況にあると言える。

一方で、日本のジェンダーの教育社会学的研究では、2000年代までには、多くのエスノグラフィがミクロな権力関係の構築を描いたものの、近年ジェンダー/セクシュアリティ研究が隆盛しているとは言えず、欧米のようにジェンダー/セクシュアリティ研究が領域の理論的中心に位置付いているとは言えない。本研究ノートで示唆したように、上記のような分断を超えて、学際的な研究が行われることによって、ジェンダー/セクシュアリティ研究が発展し、理論的な深化を遂げると考えられる。また、ジェンダー/セクシュアリティ研究が、社会科学の中心的な課題である権力関係を読み解く機動力となることは、様々な領域の理論的發展を促すことにもなると言えるだろう。

注

- 1 本研究ノートでは、限られた紙幅の中で、Pierceの難解な理論を始め、言語人類学や社会言語学の概念について、単純化した説明しかできていない。詳しい解説は、Duranti, 1997; Hanks, 1996; 井出・砂川・山口, 2019; 名和, 2020などを参照のこと。

引用文献

- Abe, H. (2004). Lesbian bar talk in Shinjuku, Tokyo. *Japanese language, gender, and ideology: Cultural models and real people* (pp. 205–221). Oxford: Oxford University Press.
- Abu-Lughod, L. (1990). The romance of resistance: Tracing transformations of power through Bedouin women. *American Ethnologist*, 17(1), 41–55.
- 秋葉昌樹 (2004). 教育の臨床エスノメソドロジー研究：保健室の構造・機能・意味 東洋館出版社
- Basso, K. H. (1996). *Wisdom sits in places: Landscape and language among the Western Apache*. Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Bourdieu, P. (1970). The Berber house or the world reversed. *Information (International Social Science Council)*, 9(2), 151–170.
- Bourdieu, P. (1977). *Outline of a theory of practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bourdieu, P. (1991). *Language and symbolic power*. Cambridge: Harvard University Press.
- Bucholtz, M. (1999). “Why be normal?” : Language and identity practices in a community of nerd girls. *Language in Society*, 28(2), 203–223.
- Bucholtz, M., Liang, A. C., & Sutton, L. A. (Eds.). (1999). *Reinventing identities: The gendered self in discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Duranti, A. (1997). *Linguistic anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eckert, P. (1989). *Jocks and burnouts: Social categories and identity in the high school*. New York, NY: Teachers College Press.
- Eckert, P. (2008). Variation and the indexical field 1. *Journal of Sociolinguistics*, 12(4), 453–476.
- Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (2003). *Language and gender*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 (1984). 性差別のエスノメソドロジー対面的コミュニケーション状況における権力装置 (現代社会学の論点<特集>). *現代社会学*, 18, 143–176.
- Fordham, S. (1996). *Blacked out: Dilemmas of race, identity, and success at Capital High*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- 藤田由美子 (2004). 幼児期における「ジェンダー形成」再考 教育社会学研究, 74, 329–348.
- Furukawa, G. (2018). Stylization and language ideologies in Pidgin comedic skits. *Discourse, Context & Media*, 23, 41–52.
- Hanks, W. F. (1996). *Language and communicative practices*. Boulder, CO: Westview Press.
- Hanks, F. W. (2001). Indexicality. In A. Duranti (Ed.), *Key terms in language and culture* (pp. 119–121). Malden, MA: Blackwell Publishing.
- 羽田野慶子 (2004). 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか 教育社会学研究, 75, 105–125.
- Heinrich, P. (2012). *The making of monolingual Japan: Language ideology and Japanese modernity*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Heller, M. (1995). Language choice, social institutions, and symbolic domination. *Language in Society*, 24(3), 373–405.
- Hill, J. H. (2008). *The everyday language of white racism*. Maiden, MA: John Wiley & Sons.
- Ide, S., & McGloin, N. H. (Eds.). (1990). *Aspects of Japanese women’s language*. Tokyo, Japan: Kurosio.
- 井出里咲子・砂川千穂・山口征孝 (2019). 言語人類学への招待—ディスコースから文化を読む ひつじ書房
- Inoue, M. (2006). *Vicarious language: Gender and linguistic modernity in Japan* (Vol. 11). Berkeley, CA: University of California Press.
- Irvine, J. T. (1989). When talk isn’t cheap: Language and political economy. *American ethnologist*, 16(2), 248–267.
- Keane, W. (2003). Semiotics and the social analysis of material things. *Language & Communication*, 23(3–4), 409–425.
- Keating, E. L. (1998). *Power sharing: Language, rank, gender, and social space in Pohnpei, Micronesia* (Vol. 23). New York, NY: Oxford University Press.
- Kockelman, P. (2006). A semiotic ontology of the commodity. *Journal of Linguistic Anthropology*, 16(1), 76–102.
- ことばと社会編集委員会 (編) (2014). セクシュアリティ, 権力, 攪乱 三元社
- Kroskrity, P. V. (Ed.). (2000). *Regimes of language: Ideologies, politics, and identities*. Santa Fe, NM: School of American Research Press.
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York City*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics.
- McRobbie, A. (1991). *Feminism and youth culture: from ‘Jackie’ to ‘Just Seventeen’*. Houndmills, UK: Macmillan International Higher Education.
- ましこひでのり (1991). 同化装置としての「国語」 教育社会学研究, 48, 146–165.
- ましこひでのり (2014). 日本の社会言語学はなにを

- しようとしてきたのか。どこへいこうとしているのか。—「戦後日本の社会言語学」小史— 社会言語学, 14, 1-23.
- マリクレア (2013). 『「おネエことば」論』 青土社.
- Marx, K. (1967). *Capital V. 1*. New York, NY: International Publishers.
- Motschenbacher, H. (2010). *Language, gender, and sexual identity: Poststructuralist perspectives*. Amsterdam, Netherlands: John Benjamins.
- Nakamura, M. (2014). *Gender, language and ideology: A genealogy of Japanese women's language* (Vol. 58). Amsterdam, Netherlands: John Benjamins.
- 名和克郎 (2020). 序: 「言語人類学」と「指標性」の概念をめぐる 文化人類学, 84 (4), 431-442.
- Ochs, E. (1992). 14 Indexing gender. In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*, (pp. 335-358). Cambridge: Cambridge University Press.
- 大滝世津子 (2006). 集団における幼児の性自認メカニズムに関する実証的研究 教育社会学研究, 79 105-125.
- Okamoto, S., & Shibamoto Smith, J. S. (Eds.). (2004). *Japanese language, gender, and ideology: Cultural models and real people*. Oxford: Oxford University Press.
- Pierce, C. S. (1955). *Philosophical writings of Pierce* (J. Buchler, Ed.). Mineola, NY: Dover Publications.
- Scott, J. C. (1985). *Weapons of the weak: Everyday forms of peasant resistance*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Schieffelin, B. B., Woolard, K. A., & Kroskrity, P. V. (Eds.). (1998). *Language ideologies: Practice and theory*. New York, NY: Oxford University Press.
- Shankar, S., & Cavanaugh, J. R. (2012). Language and materiality in global capitalism. *Annual Review of Anthropology*, 41, 355-369.
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). Albuquerque, NM: School of American Research.
- Silverstein, M. (1979). Language structure and linguistic ideology. In P. R. Clyne, W. F. Hanks, & C. L. Hofbauer (Eds.), *The elements: A parasesion on linguistic units and levels* (pp. 193-247). Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.
- Silverstein, M. (1985). Language and the culture of gender: At the intersection of structure, usage, and ideology. In *Semiotic mediation* (pp. 219-259). Cambridge, MA: Academic Press.
- St Pierre, E., & Pillow, W. (2000). *Working the ruins: Feminist poststructuralist theory and methods in education*. New York, NY: Routledge.
- Tannen, D. (1990). *You just don't understand: Women and men in conversation*. New York, NY: Morrow.
- 寺沢拓敬 (2015). 「日本人と英語」の社会学—なぜ英語教育論は誤解だらけなのか 研究社.
- Tetreault, C. (2015). *Transcultural teens: Performing youth identities in French cités*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Weedon, C. (1987). *Feminist practice and poststructuralist theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- Willis, P. (1981). *Learning to labor: How working class kids get working class jobs*. New York, NY: Columbia University Press.
- Zimman, L. (2016). Sociolinguistic agency and the gendered voice: Metalinguistic negotiations of vocal masculinization among female-to-male transgender speakers. In A. M. Babel (Ed.), *Awareness and Control in Sociolinguistic Research* (pp. 253-77). Cambridge: Cambridge University Press.